病気になって考えたこと

隠岐の島町立西郷南中学校　一年　　村上櫂也

　多発性外骨腫。この病気は、手や足の骨がボコボコと出てきて、手足の形が変形します。そして出てきた骨が神経に当たって、激しい痛みが出る病気です。僕は一歳の頃からこの病気を持っています。

　僕はこの病気になってから、足があまり曲がらなかったり、神経にあたる骨を削る手術を何回もしたりしてきました。

　保育所の頃は、手術するのがとても怖くて、手術当日は、「なんで手術なんかしなきゃいけないの。」「なんで僕は、こんな病気になったんだ。」と、疑問の気持ちでいっぱいでした。もちろん手術をしたからといって、すぐに調子が良くなるわけではなく、しばらく痛みが続きます。麻酔が切れた時なんて本当に激痛です。しかも、手術の次に待っているリハビリ。痛みを取るための手術だけど、痛みとの戦いになります。だから、僕は本当に手術するのが嫌で嫌で仕方がありませんでした。

　嫌なことは、痛みだけではありません。みなさんが簡単にできる正座。僕には、難しいことです。しゃがむことだってそうです。みんなが簡単にできることが、自分にはできない。僕は、この病気がすごく嫌でした。

　それと同時に、「お母さんに病気で迷惑をかけて悪いな。」と思う時があります。お母さんには、リハビリを手伝ってもらったり、手術した後に、一緒に入院してもらったりしています。お母さんは、いつも僕に

「絶対治るから。」

と、強く励ましてくれます。そんなお母さんに、とても感謝しています。お母さんだけではなく、お父さんにも、お姉ちゃんにも助けてもらっているので、家族みんなに感謝しています。

　だから僕は、家族の負担を減らそうと手術した後、お医者さんに言われたリハビリを頑張っています。どんなに痛くても弱音を吐かないように、どんなにつらくても涙も見せないようにしていました。それは、お母さんに自分のせいでこうなったと思ってほしくないからです。家族に感謝しているからこそ、僕は泣かないようにしています。

　僕は、この病気になって考えたことがあります。それは、「世界には程度は違うけれど、病気をもっていても、僕と同じように頑張っている人がいるんだ。だから自分も頑張ろう。」ということです。最初は、絶対に跳べないと思っていた跳び箱。やってみると意外と跳ぶことができて、自分でもびっくりしました。だけどマットでの前転は、スムーズに立ち上がることができないので、無理せずにやめています。このように、病気で足や手が不自由なので、僕にはできることとできないことがあります。でも、特にやってみたいことに関しては、できることを探して挑戦しています。また、勉強面は、この病気は関係ないので、頑張っています。

僕には、病気だから気づけたことがたくさんあります。病気になって嫌なことはたくさんあったけれど、それと同時に病気をもっている人の気持ちを考えられるようになったことは、この病気になって良かったことです。世の中には、病気だけでなく、いろいろな理由で辛い思いをしたり、困っていたりする人がたくさんいます。僕はそういう人の気持ちを考えて、人生を生きていきたいです。